

「石の島」を訪ねて

〔岡山県北木島〕

石材業の継続に向けて

「カーン、カーン！ ヨイトシヨ、ヨイトシヨ、大阪城もくはあ、ヨイトシヨ、北木から運んだ石でもくつ、くつ」

笠岡諸島の七つの有人島のうち最大の北木島は、良質な花崗岩を産出する「石の島」として知られる。「北木石」と呼ばれるその石は、明治時代以降、日本銀行本店本館や三越本店、靖国神社の大鳥居などの建材として使われるなど、北木島の経済とともに日本の近代化をも支えてきた。島内に残る、当時の丁場（採石場）や石工用具などは、令和元年に日本遺産「知ってる!? 悠久の時間が流れる石の島」の構成文化財に認定されている。

冒頭の歌は、かつては石材を切り出

す職人たちが息を合わせるため歌った

「石切唄」で、同じく日本遺産の構成文化財になっている。島で石材業を営む鶴田石材代表の鶴田康範さんによると「北木島の石材業は、昭和三二、三三年ごろピークを迎え、当時は島に一二七箇所もの採石場があったと記録されており、丁場には石切唄が響いていた。しかし、六〇年ごろから北木石に似た石が韓国や中国で採掘されるようになり、値段の面で太刀打ちできなくなっていた」という。現在、北木島で石の切り出しを行なっているのは、同社を含め二社だけ。石切唄も今では観光客向けなどに歌うのみとなっている。

北木島金風呂地区にある高さ六〇メートルはある現役の石切り場に、鉄骨製の「石切りの渓谷展望台」が設置

されたのは平成二九年のこと。計画し

たのは鶴田石材で、現在、この管理も同社が担っている。康範さんは「営業先でサンプルを見せた時、『これは外国産の偽物ですか?』と聞かれて、大きなショックを受けたことがある。石切り場で働く方々は、まさに職人気質。黙々と石を切り出すだけで、石材業の歴史や石のことを説明できない人が多い。北木石の競争力が落ちた原因はPR不足にもあるのでは」と思い、実際に北木石を切り出している現場を見てもらい、品質の良さを知ってもらおうと考えた」と、展望台設置の経緯を説明する。

「北木石は鉄分を含むため、粘り（衝撃への耐性）があり、薄く加工しても割れにくく、彫刻に使っても角が欠けに



石切りの渓谷展望台。取材当日には、広島県の私立英数学館高校の生徒たちが見学に訪れていた。

くい一方、鉄分がサビとして現われることがある。しかし、鶴田石材が扱う石は、地中深くから切り出すことで圧力がかかり変色しにくい特徴がある」

しかし、先代で父親の英輔さんから「わしらは猿山のサルじゃない。人が見ている時にわしらが大ケガをしたらどうするんだ」と猛反対された。康範さんは、ハシゴなどを整備し、作業

の安全を確保した上で展望台の整備を進めたが、父親からは一年ほど口を聞いてもらえなかったという。

「父親も内心は常に気にかけていたよ」
うで、日本遺産に認定されたときは「これで安心して死ねる」と漏らしました（笑）」

鶴田石材では、北木石を活用した産業観光を取り入れたものの、事業の中心は採石である。現在、島で切り出した石は、トラックに積み込んでそのままフェリーで本土へ運ぶ。石材業が最盛期だった当時、笠岡と島を結ぶフェリーは五社あったが、貨物を積載できないこともあったという。今ではフェリー会社が二社まで減ったにも関わらず、貨物には空きが多い状況となっている。「フェリーは島のライフライン。石材業を継続させることは、生活航路の維持にも直結している。多くの資源を外国に頼らなければならぬ日本にあって、石材は自給可能な資源。日本



鶴田石材の鶴田康範代表。

遺産の認定により、やっと皆が同じ方向を向きつつある。ようやくスタートに立った気分だ」と、康範さんは語る。

島巡りの拠点施設

北木島を巡る上で拠点となるのが、豊浦港にほど近い「K's LABO」だ。江戸時代から現在に至る島の石材業の歴史について、当時の写真や道具とともに学習できる「ストーンミュージアム」や、地元の鯛で出汁をとったラーメンなどの食事を楽しめるカフェを備えた複合施設で、自転車などの貸し出しも行なっている。



「K's LABO」の「ストーンミュージアム」では北木島の石材業の歴史を学べる。

料理の調理も含めて、普段は一人で施設の管理運営を担う近藤静代さんによれば、北木島で石材加工業を創業し、現在は笠岡本土側で石材卸業を手掛けている鳴本石材株式会社なるもとの鳴本哲矢さんが、「かつての石材業の歴史を伝えた」と平成二九年にK's LABOを開業したという。

現在では、ミュージアムで石の歴史

を学んだ上で、レンタサイクルで島を巡る観光客が多く、日本遺産認定により修学旅行や社会科見学で来島する団体なども増えている。また、地元の北木小学校の子どもたちがふらっと遊びにくることもある。「島の皆さんがもともと大事にしていた歴史や文化が日本遺産に認定された。コロナも明けて、より大勢の方々が訪れることで、島外の人にも広く価値を知ってもらいたい」と、近藤さんは期待を寄せる。

映画館を再生した島唯一の劇場

「次週は『夜霧よ今夜も有難う』の公開です。魅力あふれる石原裕次郎のヒット曲に乗せて……」

北木西公民館の友野雅典館長が、かつて実際に「光劇場」で使われていた予告文を読んでくれた。石材業が最盛期だったころの北木島には、約七千人もの人口があり、皆の娯楽の中心は映画だった。島には映画館が四つもあり、

金風呂地区にある「光劇場」もその一つとして、住民たちの余暇になくはならないものだった。同劇場は、島出身の笠岡市議会議員・赤瀬光氏が開業し、昭和二十七年ごろから四二年ごろにかけて営業していたという。

当時は良く知る「北木おばさん会」の方々は、「集落にあるスピーカーからあらすじの放送が流れると、ウキウキと出かけていった。あんまり裕福ではなかったから、ビラ配りを手伝って観賞代を無料にしてもらっていたこともあった」と、思い出を笑顔で話してくれた。

閉館した劇場に再び光が当たったのが平成二六年。複数のアーティストが北木島北部で創作を行なう「ノースデザインプロジェクト」が実施され、映像作家の吉川寿人さんが島の石材業について紹介する約二〇分の映像を制作した。この過程でプロジェクト参加者が眠っていた光劇場を見つけ、制作映



「光劇場」の運営を担う皆さん。

像の上映場所として再整備するため「光劇場復活友の会」が発足したという。同友の会の馬越紀久子^{うまこし}さんは「劇場の復活に向けて防火・耐震などの高いハードルがあり、一時は諦めそうになった。しかし、メンバーの竹本公子^{ひとこ}さんの『頑張ろうや！』の一言で皆が奮い立った」と振り返る。
現在、「復活友の会」から「光劇場友

の会」へ名前が改められ、西公民館を窓口として、地域の有志たちが運営を担っている。映像は、土日・祝日の昼、または予約制にて観賞することができ、併設された「島カフェ」ではコーヒーなどを楽しむこともできる。映像を五分ほどにまとめた英語字幕版も制作しており、海外からの観光客にも好評を得ているという。

高品質の牡蠣を国内外へ出荷

島の北東部に位置する水産会社「勇^{ゆう}和水産」。主要な事業は平成一三年から始めた牡蠣養殖だ。代表の藤井和平^{かずひろ}さんは、宮城県など全国各地の牡蠣養殖へ勉強に向き、近年ではさまざまな新技術を導入するなど、事業経営の安定・拡大を模索している。

「北木島周辺海域は、本土と比較して河川が少ないこともあり牡蠣の成長が遅い。通常、夏に産卵のため身痩せしてしまうが、三倍体（通常二対からなる

染色体を三対持つ種苗であれば繁殖をしない分、その時季でも出荷ができる」

一般的に牡蠣養殖で使用されている筏での吊り下げ方式は、牡蠣の種苗を付着させるホタテ殻や筏そのものを使用後にゴミとなるため、延縄式への切り替えを進めるなど、持続可能な漁業に向けた取り組みも行なっているという。また、勇和水産では殻付きで牡蠣を出荷しているのが、形の綺麗な牡蠣が求められる。シングルシード（牡蠣を付着させずにバラバラの状態で籠に入れる手法）も試みているが、殻へのフジツボ固着を防ぐまでには至っておらず、将来的には陸上養殖の導入も検討している。

同社の取り組みは養殖技術の改善・改良に留まらず、出荷方法にまでおよぶ。牡蠣を低周波で揺らすことで細胞を壊さず冷凍する「DENBA^{デンバ}+という機械を導入し、冷凍牡蠣の主力商品化に成功した。藤井さんによると、牡

蠣の価格は通常一二月がピークでそれ以降下がっていくが、本当に美味しいのは二月から三月。冷凍ならば一年を通じて同じ価格で最も美味しい状態の牡蠣を提供できるという。購入者からは、「生牡蠣以上に美味しい」との声も多いそうだ。この冷凍牡蠣は、国内に留まらずタイやシンガポールなど海外へも輸出している。

「今後、自社の船を移動式オイスターバーに改造し、養殖現場を見学しながら牡蠣を食べてもらおうと構想している。島に来た人の思い出に残り、喜んでくれたら嬉しい」



勇和水産の藤井和平代表。

高齢者支援を担うNPO

人口の約七割が六五歳以上の高齢者である北木島。NPO法人かさおか島づくり海社（がびしや平成二八年設立）は、北木島に本部を置き、笠岡諸島全体の生活課題の解決や交流人口の増加を目指し、デイサービスやコミュニティバスの運営などに取り組んでいる。

コロナ禍での福祉事業の困難さについて、鳴本浩二理事長は「島の住民がコロナで自宅療養となった時、うちの職員が感染リスクを負った上で食事などを届けにくしくなかった。島内もピリピリしていて、本土から戻ると『どこに行っていた？』と強い口調で聞かれたこともある。また、笠岡諸島の住民が集うイベント『島の運動会』も中止にせざるを得なかった」と振り返る。幸いにも行政や地域住民によるコロナ対策が功を奏し、北木島を含む笠岡諸島では大規模なクラスターは生じなかった。島の運動会も住民からの再開希



かさおか島づくり海社の鳴本浩二理事長。

望の声を受けて、今年度は開催する見込みだという。

島づくり海社は、笠岡市から委託を受け、「グリーンスローモビリティ（グリスロ。時速二〇キロメートル未満で公道を走る電気自動車）」を運行している。令和元年の国土交通省の実証事業を契機にグリスロを導入、同四年一〇月からは予約制タクシーとして、年末年始・盆休みを除く毎日八〜一七時に運行している。現在の利用者は年間約四千人で、観光客による利用に加えて、地域住民の足としても活用されている。料金は島内同一区域内百円、区域間は二百円

だが、島在住の六五歳以上は無料となっている。港から自宅まで運転手が荷物をお届けすることもあるなど、住民の「福祉タクシー」としての役割も担っている。「島づくり海社として、今後は特産品開発により力を入れていきたい。島の住民は、品物を作ることは得意だが、販路開拓や情報発信を苦手としているので、そこを担っていければ。高齢者を相手にしているからこそ、スピード感が大事。一年以内に実現させたい」と、鳴本理事長は意気込みを語った。

二四時間対応となった諸島の急患搬送
北木島を含む笠岡諸島には常勤の医師・看護師はおらず、月に数回の訪問診療やオンライン診療がなされている。そこで、急患搬送に対応するために建造され、令和五年度に導入されるのが救急艇「みたけ」（約一九トン）である。船内には、ストレッチャー、酸素吸引器、AED（自動体外式除細動器）など救

急車と同等の設備が整備されている。笠岡地区消防組合高森恒行課長は「これまででは島で急患が発生した場合、委託船で本土まで搬送後、港で救急車に移し替え、そこから救急処置が開始されていた。救急艇導入後は、救急隊員が直接出勤し患者にすぐに処置を開始することができるよう。本土の港に着く前に病院側と搬送先などのやり取りを進めることも可能」と話す。みたけは、船長四名体制を組むことで二四時間稼働可能。巡回速度二七ノットで、現地に迅速に駆け付けることができる。ドクターヘリが出勤できない夜間も稼働できるのは大きな強みだ。四月からの訓練期間を経て、七月より本格稼働される予定。住民はもちろん、来島者にとっても心強い存在となるのではないだろうか。

「石の島」の歴史を活かした観光振興、牡蠣養殖をはじめとする水産振興、新技術を活用した福祉サービスの摸索と



救急車と同様の設備を備える救急艇「みたけ」。

救急艇の建造による二四時間態勢の急患搬送など、行政、島の団体や住民が一体となって持続可能な島づくりに取り組む姿を垣間見ることができた。

（文・石川／写真・小原佐和子）

（本号巻頭グラビアもあわせてお読みください）